

# LET 関東支部だより

外国語教育メディア学会

第 43 号

2009年3月発行

## 英語教育への提言

### 授業に始まって、授業に終わる

小池 生夫（慶応義塾大学・明海大学名誉教授）

私は本年3月末日をもって通算54年の英語教師生活を終えた。一瞬の間に時が過ぎ去った思いである。22歳で大学を卒業して高校の英語教師となり、標準的なレベルの高校、定時制高校、超高校級の高校、トップレベルの大学、一般レベルの大学、大学院などで約1万6千人の生徒、学生、院生を教えた。しかし、最後までこれで満足という授業をした思いがない。あそこでこうやっておけばよかったという悔いが残る。授業を仕上げるのは芸術品をつくるようなものである。二流の人間には、所詮無理なのかもしれない。しかし、それなりに英語教育を良くしようと一生懸命に生きてきたことだけは確かなのである。

私は若い時から英語教授法を熱心に学んだ。戦後のオーラルアプローチ導入の時期で、講習会にも通った。しかし当時から大学受験準備学習が盛んで、英文和訳、英文法主義時代でもあった。オーラルアプローチと伝統的教授法の間には乖離があった。それが私の悩みであった。50分の授業過程でそれらの長所をいかにして取り入れるかに苦心した。多読も宿題を出して盛んに試みた。勤務校が研究指定校であった故もある。生徒・学生のレベルによっては英語を多用した。特にリーディングの授業ではそうした。それと関連して暗誦、暗記をさせた。語彙を増やすばかりでなく、英語らしさを身につけるためである。英語は単語や表現を頭に入れなければどうしようもない。教室ではテープレコーダーを利用もした。授業参観もし、先輩の授業の味に圧倒された。生徒や学生のレベルも最低から最高まであった。積極的な者から消極的な者まで多様であった。

そのような授業の経験からいえることは、授業は教師の原点であるということである。どんなに学校業務がいそがしくても、これだけは護らなければならない。また、人を教えるのは時として感激を味わう。感激は結果的に自ずと湧き上がってくるもので、教師が計算で与えるようなものではない。それは教師も学習者も長い間真剣な努力をした後の成功の一瞬においてである。また、授業の厚みやふくらみは、自分に本質的な英語力と教養をつけることに基づく。深い広い知識と多種多様な指導技術の練磨による。教室を見渡して、ひとりひとりの学習者の気持ちを直感し、この瞬間に対策をとる実力がほしい。教師は教室では一人だけの舞台である。否応なしに生徒にも自分自身にも試される。生徒は能力的に低いほど、それに合わせながら彼らの英語力を引き上げる授業を工夫する必要がある。教え込むよりも生徒にわかってもらう授業をして、学習の動機をもてるように生徒を誘うことである。

英語の授業と人間教育は一体である。教師は自分に適応したベストの方法で生徒、学生と向かい合う。それによって生徒の心にふれ、人間性を高める。教師は自分の人間力を賭けて生徒と向かい合うのである。

卒業生からあのと先生に習って役立ったと聞かされる時がある。英語で原書を多量に読ませ、要約を英語で書かせて提出させる。アメリカからの留学生たちを招いて、内容をまわりの学生たちと話し合ってもらおう。異文化比較を入れ込む。単位をとるだけのために授業に出ている生気のない学生を教えたこともある。そういうときには腰を据えて彼らの心に飛び込む。安心と挑戦の心を植付ける。私の教師半世紀は授業に始まって、授業に終わったが、結局未完成のままである。授業は奥が深い。

## LET関東支部第121回研究会報告

神田 明延（首都大学東京）

今年度の秋の大会は、夏に World CALL があった関係で、地方開催をせずに関東近辺の開催となり、交通至便な横浜のビジネス街の複合ビルにある関東学院大学メディアセンターで10月18日(土)に行われました。大会テーマは「効果的な音声教育」ということで、もう一度LETの原点に戻って音声教育を見直す大会となりました。



午前の開会前に開かれたワークショップでは「シャドーイングを無理なく行なうには」というタイトルで、今日音声教育で脚光を浴びているシャドーイングを自己開発のソフトを利用して、学生や教員に負担とならないように自在に進められ、高機能でありながら簡易なインターフェイスは好評のようでした。

それと並行して行なわれた賛助会員のプレゼンテーションでは電子黒板をデモしていただきました。IWB(Interactive White Board)という名が世界的には定着している教具ですが、その多様性について今回また認識を新たにしたいようです。内田洋行様のテンポの良いプレゼンで、貼り付け式、前投影式ホワイトボード、プラズマ方式などのハード形状とともに、ソフトウェア面でも多様性を紹介していただき、授業にどう取り込むかが楽しみなものに映りました。

その後開会行事とともに、基調講演として御園和夫氏（関東学院大学教授）より「今日のコミュニケーション主体の英語教育における音声教育とは」と題して、いわゆる World Englishes の時代に多様な英語を区分され、その中で起こる英語音声の変化なども紹介しながら、我々が何をターゲットとして学ぶか示唆され、一つ大きな座標を引かれた感があり、有益な講演でした。

昼休みと展示を挟んで、午後の研究発表・実践報告では九つの発表が三会場に分かれて行なわれました。キーワードで追えば電子黒板、英語音声学、ウェブコラボレーション、ウェブ教材、m-Learning、ビデオカンファレンス、シャドーイング、音声教材開発、ハイパーコレクションなど、やはり大会テーマと関連して音声教育関連のものと、時代の流れとして e-Learning 関連のものが多く、各会場で活発な議論のやり取りが行なわれました。

最後に授業研究として「リメディアルにおける音声指導を中心にした英語授業実践」と題して、鈴木政浩氏（西武文理大学）より、日頃から英語学力不足で入学して来る学生達にメディアを活用して、シャドーイングなどの音声訓練を徹底して取り組みさせ、見事にリスニング力を向上させ、自信を与えている様子は快挙と見えました。その一部にはさらに進んで、CNNなどのシャドーイングなどにも挑戦して、TOEICでも高得点をとるなどの目覚ましい成果を出す学生も居るようです。また会場でも模擬的に音声練習を実際に参加者にやらせてもらうなど、授業の様子のビデオとともに、音声教育の重要性を実感させる講演となりました。



閉会行事の後は、地の利を活かして中華街で懇親会を行い、発表者、参加者、運営者ともども楽しい一時を過ごせました。なお大学祭等様々な学校行事等が忙しい時期ではありましたが、90余名の参加者を見て盛況な秋の大会でありました。

## 高専での初めての英語授業

清水 公男（木更津高専）

高専に移り早一年が過ぎたが、これまでの学校と異なる教育課程と学生の意識に戸惑う一年であった。高専は中学校を卒業した生徒を受け入れ、5年間の一貫教育によって専門的知識・技能を修得させることを目的とした高等教育機関である。卒業生は、通常の高校→大学の7年の課程を修了した学生と比べても同等以上の実力を身につけるわけで、理系科目中心の授業はかなりハードであり学生の学習への負担は大きい。しかし一方で英語力は弱く、これが全国の高専の英語科目担当者の共通の悩みでもある。理由は色々ある。高専の英語教育カリキュラムが、低学年（1・2年生）から高学年（3年生以上）に進むにつれて単位数が少なくなっていく「先細り型」であることや、筆者が今年度担当した学生には英語嫌が多いこと、理数系の科目の授業・課題に追われて英語の学習に注ぐ時間が極めて少ないこと、更に大学受験というハードルがないこと等である。従って、予習・復習などあまり期待できないので、授業は「一回興行」的なものになりがちであり、どの教育機関にも共通の悩みである「どうやって勉強させるのか？」ということを考えながらの実践であった。

### 1. 授業科目

担当科目は2年生の必修の「英文法 II」で、1年次に英文法の内容（知識）を一通り学習した学生が、学んだ文法知識の活用力を伸ばすのを目指した授業である。テキストは自主教材を使った。1単位ものなので、前期15回、後期15回の授業で、使用教室は通常の教室であった。

### 2. 授業の構成・活動例

高専の学生も今時の学生で講義式の授業では寝込んでしまうので、徹底して英語を書く作業をさせ「寝させない」授業形態をとった。英語を書かせるのは学生にかなり嫌われるが、高専の多くの学生は辞書を引いたり、英語を書くことを厭うので、入学して1年も経つと、簡単な中学校レベルの単語のスペルが綴れない子がかかなり目立つようになってくる。

教材はA3版で、表は英作文課題、裏には自由英作文的タスクを与え、毎回提出を義務づけた。授業の始めに10分程度文法知識の確認説明と本時の活動の指示を与え、後は学生に作業をさせた。表の課題は極めて簡単であり、基本的な暗記例文の日本語があり、それに対応する英文をチャンク毎にバラし、それを並べかえさせる課題である。ポイントは学生に主語と動詞をまず設定させ、次に動詞の後に続く語句を確認させることである。当然、少しずつレベルを上げるように工夫はし、最後は文レベルのまとまりのある英文で並べかえ作業をさせ、課題終了時を見はからって解答を配布し、お互いの終わった所までの課題を、学生間で相互に交換し解答チェックをさせる手順である。その後、プリントの裏面にある本時で扱った、例えば「進行形」を使う設定の writing タスクに取り組みさせることになる。英語のミスは多少は OK であるが、スペルミスがあれば評価点に入れないと言うと、面白いことにこの作業をさせると次第に辞書を使う学生が増えていった。

この様な実践は目新しいものではなく、CALL 教室を使えば異なった展開もあるでしょう、ただ media の進化と共に英語を学ぶ原点の一つである「書く」という作業がおざなりになっているのではないのでしょうか。テストや workbook 等の課題も客観的な選択式のものが多く、「分かったつもり」、「できたつもり」の学力が定着するのは心配です。media 利用の手法も自分なりに考え直していきたいと思っていますところ です。

## 特別講座 "Pronunciation Clinic"

田中 敦英 (桐朋高等学校)

### ◆講座概要と開講目的

本校では、普段の授業で扱いにくい専門的な内容を扱う「特別講座」を教員が年度ごとに自由に開講できる。今回筆者は、時間を取って個別指導することが難しい「発音」の技能の集中訓練することを目指して"Pronunciation Clinic"を開講した。音声学的な特徴を正確に体得するだけでなく、文や文章を表情豊かに声に出して読めるように、段階を追って練習することを主眼とした。また、受講者が自分の発音の進歩を実感できるようにするため、開講期間を通じて3回の音読録音(カセットテープ)を実施した。

### ◆内容と参加人数

講座は全14回で、全て火曜日の放課後・7限目(15:20-16:10)にLL教室で実施した。扱う内容は基本的には各回完結とし、1回ごとに特集する音声的な特徴を変えた。ただし、発音改善を実感するには全ての回を通して一貫した題材を音読する方が効果的であると考え、各回で扱った項目に気をつけて一つの文章を音読する練習を授業時間の後半に設けた。音読録音は講座の初回(4月)・中間(6月)と最終回(12月)に行い、最終回には3回を通して聞いた感想を書いてもらった。

各回で扱った内容と参加(受講)人数は、以下の通りである。

回数	内容	人数	回数	内容	人数
1	講座説明・録音1	28	8	LR特集1	20
2	リズム	30	9	LR特集2	20
3	イントネーション	28	10	あいまい母音	18
4	音のつながり	14	11	文の中での強調	12
5	母音	15	12	文中の強調・朗読発表	15
6	子音・録音2	19	13	文中の強調・朗読発表	18
7	文法と音読	23	14	講座まとめ・録音3	18

なお、本講座で使用した教材は自作教材であるが、各回の教材作成に当たっては以下の資料を参考にした。

#### ・各回のポイント解説と練習：

田中敦英・田中初津美・工藤洋路(2008)『声に出すリスニングトレーニングCD』 クリエイティブコア。  
(ELEC 同友会英語教育学会監修企画)

#### ・文章音読練習：

島岡丘(1990)『現代英語の音声学』 研究社出版

### ◆取り組みと成果

例年特別講座では1学期の受講者が多く、2学期へと進むにつれ減りがちだが、本講座では6月の段階で20名前後になった後は安定し、最終的に18名が最後まで受講してくれた。

生徒の取り組みは、すばらしかったという言葉に尽きる。近年本校の生徒の発音は、中学時代の取り組みの成果もあり、以前より格段に良くなっている印象がある。それでも、各人が間違っ身に着けてしまった癖や調音の間違いが各々に存在する。自分の癖を知り修正する手がかりになればと毎回の講座

を用意したが、受講生は狙いをよく理解し、真面目に取り組んでくれた。発音を改善したいという目的意識が強い学習集団だったこともあり、受講者どうしで発音にコメントをしたり全員の前で音読を発表したりする活動も一生懸命やっていた。結果、3回の録音でかなり文章の読み方が改善したと多くの受講者が感じてくれたようだ。

この講座の一番の成果は、何と云っても、「英語の発音を改善すること」をポジティブに捉えてくれる生徒が期待以上に多かったことを知ることができたことと、彼らの要求にある程度応えることができたことだと思う。開講した者としては、嬉しい限りだ。

#### ◆機器は使えよう

本講座では、かなりクラシックなシステムの LL 教室を使用した。カセットデッキブースのみである。生徒の中には自宅にカセットテープを再生する機械さえない者もいて、時代遅れのシステムなのでは？とも思ったが、単純に3回連続で録音する機能だけで今回の実践には十分であった。また、早送り・巻き戻しが比較的容易なのもテープの利点である。最新機器を使いこなすのも大切だが、決して新しくない設備を生かすことで、シンプルながら深みのある取り組みができるものだと感じた。

XX

### 次号予告

支部だより（44号）の発行は2009年10月の予定です。

- 内 容**
- \* 英語教育への提言
  - \* 第122回研究大会報告
  - \* 実践報告
  - \* 研究・研修部会だより

**その他** 新しい企画やアイデアをお持ちの方は、支部だより担当まで情報をお寄せください。

## 書く力を育てるために

— 英語新聞の取り組み —

本多 敏幸（千代田区立九段中等教育学校）

平成 20 年度に担当した中学 2 年生に 2 回にわたって英語新聞を書かせてみた。英語による新聞作成指導は初めてだったが、いろいろと発展させられる活動であると感じた。

5 月に第 1 号、9 月に第 2 号を作成させたが、その取り組みについて報告したい。

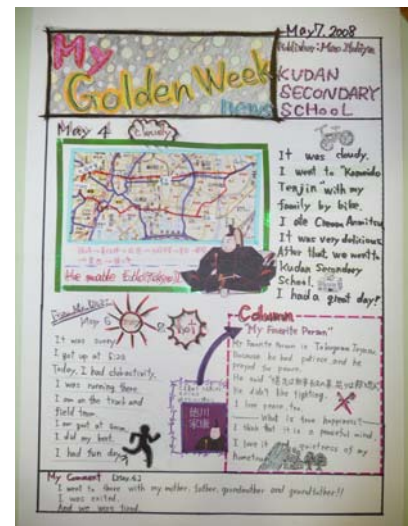
第 1 号では、My Golden Week という新聞名で、次の記事を書かせた。

トップ記事：ゴールデンウィーク中に書いた英文日記の中から最も紹介したい日の出来事について

セカンド記事：別の日の出来事について

コラム記事：好きな有名人について（1 年次の 3 月に行ったスピーチの内容）

生徒には見本となる型を参考にさせながらも、各自で工夫するよう指示した。また、短縮形を使わない、読み手に分かりやすいように文脈を考えて書くなどの指導を行った。一部の生徒は話し言葉であるスピーチ原稿を書き言葉に直すのに苦労していたようである。



第 2 号では、My Summer News という新聞名で、次の記事を書かせた。

トップ記事：夏休み中の一番の思い出について

セカンド記事：新聞やインターネット上のニュースの写真を載せ、説明文を書く

コラム記事：9 月に行った「10 年後の私」のスピーチ原稿を新聞用に書きかえて載せる

総語数が第 1 号より多くなるようにと指示を出し、写真の説明ではタイトルやヘッドラインも各自で考えさせ、事実のみを書かせるようにした。感想は My Comment の欄に書かせた。また、各記事の最初の文字を大きくするなど、新聞らしくなるように指導した。



私取り組みさせた英語新聞の最大の特徴は、これまで授業や家庭学習で行わせたスピーチや英文日記などの活動をまとめる形になっていることである。ゼロから書かせるとかなりの労力を必要とするが、記事の半分を一度書いたものにする事で、生徒が負担感をあまり感じないように配慮した。すべての生徒に 2 枚の英語新聞を書かせたが、どの作品も個性豊かであった。生徒にとっても楽しい活動であったようだ。ニュース以外にも、4 コママンガ、意見、広告などさまざまに書かせることができるので、これからも継続的に取り組ませてみたい。

**e-Learning研究研修部会**

塩谷 幸子 (法政大学)

2008年度第2回研究会を2009年3月7日に東洋大学で行いました。湯舟先生(東洋大学)に「記憶から見た英語学習 …e-learning 学習と教材への示唆」と題する講演を行っていただきました。認知心理学と脳科学の見地から長期記憶と学習のメカニズムを概観していただきました。脳科学の基礎概念から最新の研究成果へと言及され、そこから反復訓練の必要性、他者や環境の影響などについて示唆に富むお話の数々を聞くことができました。大変内容の濃い刺激的な講演でした。参加者からは英語教育の理論的裏付けが得られたとのご意見をいただきました。活発な質疑応答もなされ、講演終了後も質問が絶えないほどでした。

今年度は9月の第1回目研究会(CALL授業の新しい方向性について)と今回を合わせ、2回の研究会を開くことができました。e-learningの注目が高まっている昨今、新しい情報や意見交換の場を提供し、ますます活発な活動を続けてゆきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。今後取り上げて欲しいテーマなどございましたら是非ご意見をお寄せください。 kantoel-owner@yahoogroups.jp

**音声・映像研究研修部会**

飛田 ルミ (足利工業大学)  
杉本 香織 (文京学院大学)

2008年度は第1回研修会を7月5日(土)に、第2回研修会を11月22日(土)に文京学院大学本郷キャンパスで開催しました。講師及び内容は以下の通りです。

第1回目の研修会は、「e-Learning教材を用いた英語音声指導：小学校から大学まで」というテーマのもと3部構成で行いました。

- 1) 大学部門 ①羽田克夫氏(成美堂)：「成美堂 e-L 教材：実用英語 TOEIC テスト対策コース」の解説 ②飛田ルミ(足利工業大学)：音声認識システムを用いた実践報告
- 2) 中学校部門 ①松岡祐紀氏(ライトハウス)：「音声認識システム：Speak!」、「中学生テキスト(三省堂)用ソフト：e-Book」の解説 ②阿久津仁史先生(文京区立第八中学校)：Speak!の音読スコアの変化を用いて効果を検証した研究報告
- 3) 小学校部門 ①Mr. Koji Kato(元マイクロソフトエンジニア、現在 Moonshoot 代表)：現在開発中の小学生用英語教材の解説 ②関子啓子先生(武蔵野東小学校)：iPod を利用した音声指導の実践報告

第2回目の研修会は、「フリーウェアで教材作成：音声から動画まで」というテーマのもと2部構成で行いました。

- 1) 滝本晴男先生(大妻女子大学)：「AV教材の作成」  
滝本先生所有の貴重な資料(LLA 関東支部第一回研究会の録画資料、NHK の子供英語番組、Cousin William I~IV)に基づく、教材製作過程の解説、及びご自身の工夫を凝らした音声指導の実践報告
  - 2) 下山幸成先生(東洋学園大学)：「フリーウェアを利用したオリジナルの音声・映像教材作成」
- 参加者の皆様からリクエストが多かった、Audacity を利用した音声教材、YouTube を利用した映像教材の作成方法の解説、及び YouTube から取り込んだ、オバマ大統領の演説を利用したオリジナル教材の紹介  
2008年度の研修会にご参加、ご協力下さいました皆様に厚くお礼申し上げます。

2009年度も、会員の皆様のニーズに合った研修会を開催する予定でありますので、皆様のご参加をお待ちしております。

## 教材教授法研究研修部会

久保田 章 (筑波大学)

当部会の今年度の研究テーマは、「教材開発のための基礎研究」でした。これは、昨年度からの継続的な課題として、大学生向けの総合教材の作成を計画しているのですが、その準備のためでもありましたが、さらには、昨年度以上に様々な方面からの資料やデータを収集することで、より適切な教材開発の枠組みの作成につなげることを目的としていました。

会員は各自の興味に基づき、特に発信面の技能に焦点を当てて、学習者のパフォーマンス・データの収集や研究資料の分析を行いました。具体的には、c-learning（携帯電話を使った授業）やデジタルポートフォリオを取り入れた授業を行ったり、高校教科書の課題の内容や配列の分析を通して、高校における学習者の学習経験の概要について検討しました。

他には、会員による児童英語教師のための教室英語のテキストの出版もありました。

## 学習環境研究研修部会

石川 洋一 (日英会話学院)

語学教育の現場で LL 関係の機器をどのように使うか。そのシステムの限界をどのように見つけていくか、またどうすればうまく使えるのか。

これらについて HP 上でレポートを公開していくという形で活動しています。

当部会では、2007 年度に「CALL、LL 教育システム意見交換会」と題した CALL および新しいタイプの LL 機器の研究を実施しました。

これを受けて今年度からは、より詳しく LL 機器についてレポートをしていきたいと考えています。私の学校（日英会話学院）で AdiLL-1000（アンペール社）を導入したこともあり、このシステムをうまく使う方法について考える、という形になろうかと思えます。

今年度は 6 月に「AdiLL-1000 を使い倒そう Meeting」を実施いたしました。そして 3 月には、「LL でのリスニング指導と、デジタル LL」と題した会合を持ちました。いずれも参加者は少なかったのですが、メーカーの方のご協力を得て有意義な集まりになったのではと自負しております

HP 上には、それぞれの会の資料が貼り付けてあります。

AdiLL-1000 をお使いの方、また導入を検討している方々の参考になろうかと思えます。

LET 関東支部の HP から入ることができますので、是非、ご覧下さい。

学習環境研究研修部会では、今後も実際の機器を提供していただいて操作に慣れる、機能を試してみるといった場を提供していきたいと考えています。私の学校でも随時見学を受け付けていますので、ご興味のある方はご連絡ください。



